

芦別の炭鉄港ストーリー

芦別は1893(明治26)年に開拓が始まり、1897(明治30)年より掘りはじめられた石炭は、1913(大正2)年に滝川～富良野間に鉄道が開通したことから三菱鉱業が本格的に開鉱したのを契機に徐々に拡大していきます。1938(昭和13)年に高根鉱業所が開坑、翌年に三井鉱業所一坑が開坑。1940(昭和15)年には炭鉱の専用線として三井鉱山芦別専用鉄道ができました。1944(昭和19)年には明治鉱業が東芦別炭鉱を買収して開業、1947(昭和22)年に油谷炭鉱が開坑と「芦別五山」と言われる大手の5社が次々と開坑し、人口も最高7万5千人余りに達するなど「炭鉱のまち芦別」を築きました。

しかし昭和30年代、石油へのエネルギー転換により多くの炭鉱が閉山、1992(平成4)年に三井芦別鉱業が閉山したことと坑内掘りの炭鉱は芦別から無くなりました。また基幹産業が厳しい状況に置かれた

中で、市はまちを再活性化させるために企業誘致や観光開発に力を入れテーマパークの建設などを行ってきましたが、テーマパークについてはすでに閉園をしています。

近年では旧頬城小学校がイベント時に公開され、旧三井芦別鉄道炭山川橋梁前の公園に繋がるゲートが期間限定で解放されるなど、芦別に残る炭鉱遺産を美しい自然環境や特産品と共に地域の魅力として捉え、地域資源、そして観光資源のひとつとして活用していくことが期待されています。

星の降る里・あしべつ

芦別市は北海道の中央部に位置し、道央・道東・道北圏の接点にあり、道内の中では温暖で自然災害が極めて少なく快適な生活環境にあります。市域は東西に約25キロメートル、南北に約49キロメートル、面積は約865.04平方キロメートルと全国有数の広さを有し、このうち山林が全体の約88%を占め自然豊かな環境にあります。このため、環境省から「星空の街」に認定され、「星の降る里・あしべつ」をキャッチフレーズとしたまちづくりを行っています。芦別は明治時代後半から炭鉱がまちの発展を支え、企業誘致や産業振興、農林業にも力を入れ米やメロンを筆頭に、じゃがいもやゆり根など品質の良さで知られています。

【札幌から】
車：約1時間50分(道央自動車道経由)
JR：約1時間50分(函館本線→根室本線)
バス：約2時間10分(直行高速バス)

【新千歳空港から】
車：約2時間(道央自動車道経由)
JR：約2時間40分(千歳線→函館本線→根室本線)

【旭川空港から】
車：約1時間20分(国道38号経由)
JR：約1時間50分(バス→富良野→根室本線)

制作：炭鉄港推進協議会（事務局：空知総合振興局地域創生部地域政策課）

〒068-8558 北海道岩見沢市8条西5丁目
電話番号：0126-20-0146 FAX番号：0126-25-8144



炭鉄港 北の産業革命の物語
<http://www.sorachi.pref.hokkaido.lg.jp/ts/tss/tantetsuko.htm>



令和元年度文化資源活用事業費補助金
(観光拠点整備事業)

パンフレット背景色は12市町それぞれの炭鉄港イメージカラーです 【芦別：星空】

日本遺産とは



JAPAN HERITAGE
日本遺産

「日本遺産(Japan Heritage)」は地域の歴史的魅力や特色を通じて我が国の文化・伝統を語るストーリーを「日本遺産(Japan Heritage)」として文化庁が認定するものです。ストーリーを語る上で欠かせない魅力溢れる有形や無形の様々な文化財群を、地域が主体となって総合的に整備・活用し、国内だけでなく海外へも戦略的に発信していくことにより、地域の活性化を図ることを目的としています。

【本邦国策を北海道に觀よ!～北の産業革命「炭鉄港」～】は令和元年度日本遺産に認定されました。

日本遺産ポータルサイト <https://japan-heritage.bunka.go.jp/ja/>

北海道の近代化を支えた三都を結ぶ物語

北海道の近代化は、1872(明治5)年、石造埠頭の建設が開始された小樽からスタートしました。その後、小樽が北海道のゲートウェイとして一段の飛躍を遂げる契機となったのは、1879(明治12)年、北海道初の近代炭鉱である官営幌内炭鉱(現在の三笠市幌内)の開鉱でした。

その石炭を運ぶための幌内鉄道は、北海道初の鉄道として、まずは1880(明治13)年に手宮(小樽)～札幌間が部分開通、1882(明治15)年には幌内まで全通しました。幌内鉄道は、小樽港への石炭運搬だけではなく、北海道内陸部へ入植する人や収穫した農産物の輸送に活躍とともに、人や物資の輸送円滑化を通じて道都札幌の発展も支えました。

1889(明治22)年、炭鉱と鉄道は元薩摩藩士の堀基が設立した北海道炭礦鉄道会社(北炭)に払い下げられ、同社によって空知炭鉱(歌志内)と夕張炭鉱(夕張)の開発が進められました。それに伴い、1892(明治25)年に室蘭まで鉄道が延長され、岩見沢が道央圏を東西南北に結ぶ鉄道の交点として、室蘭が石炭積出港として発展する礎となりました。

1906(明治39)年には、鉄道が国有化されました。北炭は、その売却資金をもとに、英國企業2社との合併により、室蘭に日本製鋼所を設立。1909(明治42)年には製鉄へと進出し(輪西製鉄場:現在の日本製鉄室蘭製鉄所)、室蘭は鉄の街として不動の地位を確立しました。

一方、鉄道国有化によって北炭の独占輸送体制が崩れ、財閥各社は一斉に空知へ進出し、これを足がかりにして日露戦争で獲得した権力へと勢力を伸ばしました。このことが小樽港の一層の発展を促して、1914(大正3)年の小樽運河の開削へつながっていきます。空知・小樽・室蘭の三都を結ぶ鉄道は、全道の鉄道ネットワークの機軸となり、三都の基幹産業である石炭・港湾・鉄鋼は、北海道の産業化を先導してきたのです。

そら たん てつ こう 空から 炭鉄港

あし べつ し
～芦別市～
ASHIBETSU CITY

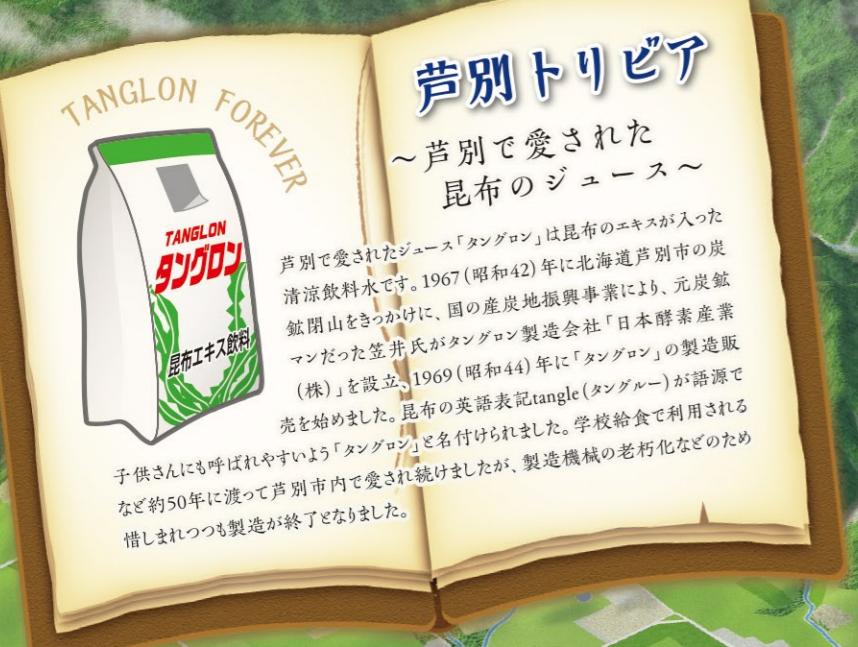
赤平市

芦別トリビア

～芦別で愛された
昆布のジュース～



芦別で愛されたジュース「タングロン」は昆布のエキスが入った清涼飲料水です。1967(昭和42)年に北海道芦別市の炭鉱閉山をきっかけに、国の産炭地振興事業により、元炭鉱マンだった笠井氏がタングロン製造会社「日本酵素産業(株)」を設立、1969(昭和44)年に「タングロン」の製造販売を始めました。昆布の英語表記tangle(タンブル)が語源で名付けられました。学校給食で利用される子供さんにも呼ばれやすいよう「タングロン」と名付けられました。学校給食で利用されるなど約50年に渡って芦別市内で愛され続けましたが、製造機械の老朽化などのため惜しまれつつも製造が終了しました。



至富良野

野花南ダム

上芦別駅

38

室知川

なまこ山総合
運動公園

新芦別大橋

芦別高校

芦別駅

根室本線

至赤平

きゅうみついむしべつでつごうたんざんがわきょうりょう
旧三井芦別鐵道炭山川橋梁



せいさだいがく きゅうらいじょうしょうがっこうこうしゃおよ たいいくかん
星槎大学(旧頬城小学校)校舎及び体育馆



炭鉄港
グルメ

～ガタタン～

ガタタンは小麦粉を水で練って小さな塊にした中華料理の「ガーダ」がルーツという説があり、野菜や肉、魚介や山菜など多くの具を入れ、片栗粉でとろみをつけて、玉子を溶き入れた具だくさんとろみのある中華風のスープ料理です。

戦後、旧満州から芦別に引き揚げた「村井 豊後之亮(ぶんごのすけ)」という方が、中華料理店「幸楽」(後の「幸楽」とは別の店)で出したのが始まりとされています。炭鉱で働く人たちの間で瞬く間に人気が広がり、芦別のご当地料理として定着しました。市内の多くの店で提供され、お店によってラーメンやチャーハンなどの様々なバリエーションのガタタン料理を楽しむことができます。



炭鉄港
構成文化財

星槎大学(旧頬城小学校) 校舎及び体育馆

～国内でも稀な規模のレンガ建築物～

1954年建設。校舎は36教室、一線校舎の全長106mと長大な外壁縫れんが積、体育馆は屋根を支える木骨トラスの幾何学的形状が特徴的です。



旧三井芦別鐵道炭山川橋梁

～当時の情景がそのまま残った鐵道橋梁～

1945年に竣工した、三井鉱山専用鐵道の橋梁。鉄橋上にはディーゼル機関車と石炭専用貨車が展示され、当時の運搬の様子を伝えています。



大倉加奈さん
炭鉱が好きすぎて北海道赤平市に移住。NPO職員、
フリーデザイナーとして活動中。

星の降る里百年記念館

道の駅スター・プラザ芦別の敷地内にあり、1993(平成5)年9月に開基100周年記念事業の一環として開館しました。展示は大きく8つのカテゴリに分かれていて、芦別の風土や歴史について学ぶことができます。「産業の歴史」コーナーには、40年前の炭鉱長屋の暮らしぶりを映像システムを使って再現しているマジックビジョン小劇場など、炭鉱関連の資料を多数、展示・収蔵しています。また常設展示のほか、期間ごとに様々な企画展も行われています。

【開館時間】9:00~17:30

(入館は17:00まで)

【休館日】5月~10月:月曜日

11月~4月:月曜日・火曜日

【入館料】一般200円、高校生100円、
中学生以下無料。団体割引あり

